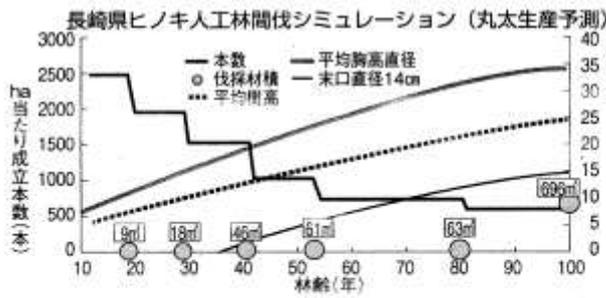


農業技術 プリズム

長崎県は、県土の約6割を森林が占め、人工林は約9万1000ha



間伐適期予測システム 計画的な木材生産へ 杉、ヒノキで活用を

00秒で、大半が杉やヒノキで木の成長には時間がかかるため、林業では、どのような林に育てていくかの長期計画と、実際に向けた間伐時期の計画策定が重要です。そのため、長期的

伐採現場では立木の状態でどのような規格(大きさ)の丸太が取れるかの判断が求められます。

そこで、林齢100年生までに必要な間伐の適期を判定し、収穫される丸太の数量を予測するために、これまで当センターで蓄積してきた県内の杉やヒノキの調査結果を基に、長崎県の杉・ヒノキに対応した「間伐適期予測システム」を作成したので紹介します。

このシステムでは、現在の人工林の状態(樹齢、樹高、1秒当たりの生育本数)を入力すると、間伐が何年後に何回必要か試算できます。同時に、そのときに伐採される材積(幹の体積)と、どの規格の丸太を収穫できるかの予測が可能です(図)。

な管理に活用できる簡便な間伐時期の判定指標が求められました。また、木材として伐採・搬出される丸太の太さや長さは、樹齢や土地の違いによりさまざまです。一方、市場では一定の規格があり、価格が異なるため、

県内の人工林の多くは、植えてから50年を経過し、利用可能な資源です。間伐材も木材として利用できることから、計画的な木材生産を推進するために、このシステムの活用が望まれます。

(県農林技術開発センター 田嶋幸一)